学位論文要旨

非外傷性イベントと解離性体験に関する臨床心理学的研究

広島大学大学院教育学研究科

教育人間科学専攻

池田龍也

目　　次

第 1 章　本研究の背景と目的

第 1 節　解離に関する研究の動向

第 2 節　出来事と解離を繋ぐ個人要因

第 3 節　解離を引き起こす出来事要因

第 4 節　本研究の目的

第 2 章　外傷性/非外傷性イベントと解離の関連の再考

第 1 節　出来事と解離の関連性の再考 (研究 1-1)

第 2 節　解離を引き起こす出来事の再考 (研究 1-2)

第 3 章　出来事と解離を繋ぐ要因としての個人要因

第 1 節　被受容感が解離に及ぼす影響 (研究 2)

第 2 節　被害的認知が解離に及ぼす影響 (研究 3)

第 4 章　解離を引き起こす出来事要因と解離体験者の心的世界の特徴

第 1 節　出来事の属性が解離に及ぼす影響 (研究 4)

第 2 節　解離体験者の心的世界の特徴に関する探索的検討 (研究 5)

第 5 章　総合考察

第 1 節　本研究の成果

第 2 節　本研究の限界および今後の課題

引用文献

第 1 章　本研究の背景と目的

第 1 節　解離に関する研究の動向

解離とは「精神が記憶や意識やアイデンティティ等を統合する能力が一時的に失われた状態」(岡野, 2002) である。解離は解離性障害のような病的な解離から，比較的健康な解離までの連続体が仮定され，これを解離連続体仮説と呼ぶ。

解離研究は現代に至るまで，尺度開発，関連要因，解離性障害 (特に解離性同一症/解離性同一性障害 (Dissociative Identity Disorder; 以下 DID)) の形成プロセスが検討されてきた。解離は Janet (1889 松本訳 2013) によって発見された当時から外傷体験が原因であると考えられ (Putnam, 1989)，このような因果関係の想定を外傷モデルと呼ぶ (Nemiah, 1998; Ross et al., 2008; Spiegel, 1984)。

外傷体験となるような出来事は精神疾患の診断・統計マニュアル第 5 版 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野・染矢・神庭・尾崎・三村・村井 (訳) 2014; Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5; 以下 DSM-5) において，命や身体の保全に迫る脅威に曝される，または他者が曝されているのを目撃することであると定義される。しかし外傷体験という術語は日常用語化しつつある。そこで以降本研究では，命や身体の保全に迫る脅威のことを外傷性と呼び，ネガティブなライフイベントのうち外傷性を伴うものを外傷性イベント，外傷性の乏しいネガティブなライフイベントを非外傷性イベントと呼ぶ。

先行研究の多くが外傷モデルを支持し，外傷モデルは解離研究の中心に位置付けられる。例えば Ross et al. (2008) は文化横断比較研究に基づき，外傷モデルが妥当であると結論付けた。他にも Nilsson & Svedin (2006) の実証研究や，Dalenberg et al. (2012) のメタ分析も外傷モデルを

支持している。

しかし，Dalenberg et al. (2012) のメタ分析は対象者 50 名以上 (以下 $N \geqq 50$) の研究に限定して分析している。彼らは $N \geqq 50$ の研究に限定した理由を，対象者 50 名未満 (以下 $N < 50$) の研究をメタ分析に含めると異質性が高くなり一般化が困難になるためであるとしている。しかしメタ分析では，対象者数に応じた重み付けを行い，この重み付けられた効果量を用いて分析を実施する。従って，敢えて対象者数の少ない研究を除外する必要はなく，対象者数によって採否を判断することは，対象研究の選定基準について妥当性を欠くと考えられる。

また，外傷モデルについても疑問が残る。なぜなら外傷性イベントに曝露されても高い解離傾向を示さないこともあり (Briere, 2006)，非外傷性イベントが原因となった DID 事例を報告している DID 事例のレビューも存在するためである (一丸, 1998; 舛田・中村, 2007)。岡野 (2007a, b) によれば，解離を引き起こす出来事は外傷性イベントに限定されず，van der Kolk, McFarlane, & Weisaeth (1996 西澤監訳 2001) も外傷性イベントと解離に単純な対応関係を想定すべきではない，と慎重な姿勢を取っている。以上を踏まえると，現在解離研究の中心に位置づけられている外傷モデルには一定の限界がある。

外傷モデルでは他の要因を一切考慮する必要がないと明言されているわけではない。しかし解離の原因を外傷性イベントに求め，他の要因について十分に検討されていないのが現状である。岡野 (2007a, b) も指摘しているように，解離を論じるためには外傷性のような出来事の属性 (出来事要因) に加え，当事者の物事の捉え方 (個人要因) も考慮すべきである。

第 2 節　出来事と解離を繋ぐ個人要因

岡野 (2007b) は解離を引き起こす要因として「関係性のストレス」を想定し，関係性のストレスはきわめて主観的なものであるため当事者の主観にも注目する必要を主張した。実際，周囲からは些細な出来事のように見えても，当事者は深く傷付き苦しむことがある。このような出来事に対する脆弱性に関して，奥山 (2005) は愛着に着目し，愛着の形成が不完全であると「易トラウマ性」を持ち，非外傷性イベントであっても外傷性イベントのような出来事として体験されることを示唆している。

この点について Sandberg (2010) は，成人期における愛着が外傷性イベントと外傷後ストレス反応 (Post-Traumatic Stress Response; 以下 PTSR) の調整変数になり，不安定な愛着を持つ者はそうでない者よりも PTSR を示しやすいことを明らかにした。以上より，個人の持つ対人関係の安定性は出来事から受ける影響の深刻さに影響すると考えられる。

杉山 (2002) は「自分を支えてくれる他者の存在を感じ，自分は他者から一定の理解や暖かさ，承認をもって大切に扱われ，支えられているという認識と情緒」を「被受容感」と呼び，被受容感が抑うつを低減することを示している。上述の Sandberg (2010) の知見も合わせると，被受容感の乏しさが解離と関連することが予想されるものの，その関連性は未だ明らかとなっていない。

高解離傾向者はそうでない者よりも，断片的な情報からネガティブなイメージを鮮明に空想しやすいことが報告されている (本間, 2013)。この知見は本研究で想定する影響の方向性とは逆である。しかし，非外傷性イベントによって引き起こされる PTSR の背景に認知的要因が存在する可能性が示唆されており (伊藤・鈴木, 2009)，解離の生起には出来事に対するネガティブな認知が作用している可能性がある。つまり客観的には些細な出来事であったとしても，当事者が出来事を被害的に捉える

ことで解離すると考えられる。

第 3 節　解離を引き起こす出来事要因

岡野 (2007a) は関係性のストレス概念を展開する中で，対人関係に由来する慢性的なストレスが解離を引き起こす可能性を指摘した。同時に岡野 (2007b) は関係性のストレスは必ずしも外傷性を帯びるものではないと述べ，非外傷性イベントによっても解離が生じることを示唆している。更に Brunner, Parzer, Schuld, & Resch (2000) は幼少期の虐待を統制すると，ある辛い出来事が繰り返されるという出来事の継続性が解離と関連し得ることを示した。以上より，出来事の継続性は解離のリスク要因であると考えられる。

第 4 節　本研究の目的

先行研究の主な問題点は，大多数の研究が外傷モデルに依拠し，非外傷性イベントの影響および個人要因が十分に考慮されていない点にある。外傷モデルに基づく解離の理解は，非外傷性イベントによって解離が引き起こされる可能性が捨象される危険を孕む。そして臨床場面では，解離の原因を積極的に外傷性イベントに求めることで，当事者の持つ個人

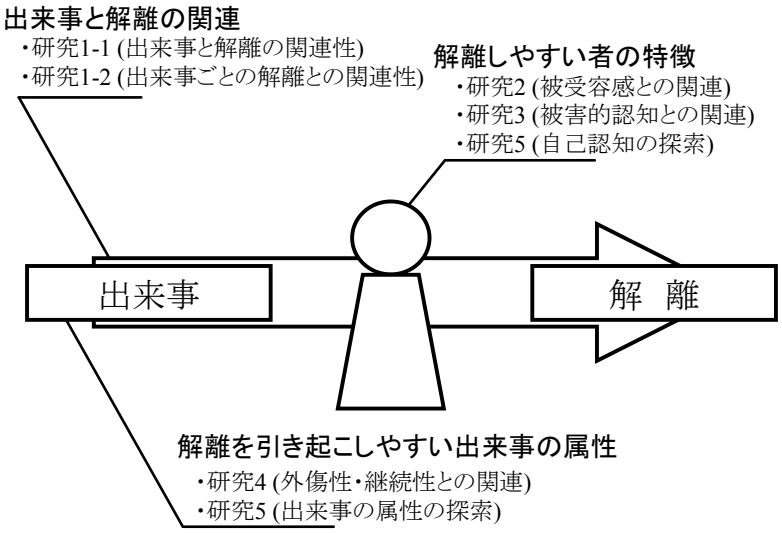

Figure 1 本研究の検討モデル

要因を見落とし，偽りの記憶の形成を促す可能性がある。

そこで本研究では，外傷モデルでは説明が困難な非外傷性イベントによって引き起こされる解離の関連要因を，出来事要因と個人要因の 2 側面から検討する (Figure 1)。その準備段階として，解離の原因を積極的に出来事へ求めるべきか否かをめぐって，出来事と解離の関連の程度を明らかにする (研究 1)。次いで, 出来事と解離を繋ぐ個人要因 (研究 2, 3, 5) と，解離を引き起こす出来事要因 (研究 4, 5) を検討する。

第 2 章　外傷性/非外傷性イベントと解離の関連の再考

第 1 節　出来事と解離の関連性の再考 (研究 1-1)

1. 目的　Dalenberg et al. (2012) で対象外となった $N<50$ の研究を含め新たにデータベース検索を実施し，出来事と解離の関連を再検討する。

2. 方法　**(1) 文献検索**　オンラインのデータベース検索による文献抽出を行った。**(2) データベース**　PsycINFO, PsycARTICLE, MEDLINE。**(3) 検索条件**　タイトルに dissociation と trauma が含まれる査読付き論文。**(4) 検索対象期間**　1986 年～2013 年 12 月。**(5) 検索結果**　208 編 (Dalenberg et al. (2012) との重複を除く)。**(6) 抽出条件と抽出結果**　(a) 精神医学あるいは臨床心理学用語としての解離に言及し，(b) 本文が英語で記述され，(c) 研究論文であるもの。以上 3 つの条件に合致する 160 編の文献が抽出された。**(7) 対象文献の選定と選定結果**　出来事と解離の 2 変数について, (a) Peason の積率相関係数を算出している, または (b) r を算出可能な統計量が掲載されているものを機械的に選定し，54 編が対象文献となった。**(8) 相関係数の抽出**　Dalenberg et al. (2012) の手法に従い相関係数が抽出され，171 件の効果量が抽出された。

3. 結果と考察　Dalenberg et al. (2012) の用いた 34 編の文献と合算し，計 229 件の効果量が用いられた。$N<50$ の新たに追加された文献は 14 編，

Dalenberg et al. (2012) 以前に公刊された $N \geqq 50$ の文献は 33 編抽出された。統合結果は r=.29 であり，高い異質性が示された (I^2=82.49%)。異質性の高さから，出来事と解離の関連は一般化が困難であることが示唆された。また異質性の高さと統合された効果量の大きさは，Dalenberg et al. (2012) とほぼ同様であった。このことから，$N < 50$ の研究を事前に除外しなくとも異質性の高さに大きな影響はないことが推察された。

第 2 節　解離を引き起こす出来事の再考 (研究 1-2)

1. 目的　解離と関連しやすい出来事と，その関連の程度を明らかにする。

2. 方法　文献に“trauma”として記載された出来事を用いて層別化した。

3. 結果と考察　文献に“trauma”として記載された出来事によって層別化し，下位集団分析を実施した (Table1)。結果，解離の原因と見做されてきた「性的虐待」や「幼少期の外傷体験」に中程度の異質性が認められた (r=.29, I^2=72%; r=.28, I^2=62%)。得られた結果から，特定の出来事だけでは解離の生起は困難であることが明らかとなった。

Table 1
出来事によって層別化した統合された相関係数

出来事	r	研究数	95% CI 下限	95% CI 上限	p	Q	df	$p.h$	I^2
幼少期以降の外傷体験	.14	7	.01	.27	.04	8.31	6	.22	28%
身体的ネグレクト	.16	6	.01	.30	.04	14.94	5	.01	67%
情緒的ネグレクト	.19	7	.04	.33	.01	5.02	6	.54	0%
ネグレクト	.23	10	.11	.34	.00	42.44	9	.00	79%
辛い出来事の回数	.23	9	.11	.34	.00	10.10	8	.26	21%
身体的虐待	.27	35	.21	.33	.00	134.79	34	.00	75%
幼少期の外傷体験	.28	21	.20	.35	.00	52.70	20	.00	62%
性的虐待	.29	46	.24	.34	.00	161.60	45	.00	72%
幼少期以降の性被害	.31	5	.15	.45	.00	16.22	4	.00	75%
その他の外傷体験	.32	13	.23	.41	.00	43.65	12	.00	73%
情緒的虐待	.32	14	.23	.41	.00	97.57	13	.00	87%
外傷体験尺度合計得点	.33	42	.27	.38	.00	231.47	41	.00	82%
裏切りによるトラウマ	.39	2	.14	.59	.00	0.45	1	.50	0%
致死性体験	.62	3	.45	.74	.00	59.38	2	.00	97%

注) $p.h$ は Q 検定の p 値を示す。

第 3 章　出来事と解離を繋ぐ要因としての個人要因

第 1 節　被受容感が解離に及ぼす影響 (研究 2)

1. 目的　非外傷性イベント, 被受容感および解離の関連を明らかにする。

2. 方法　**(1) 対象者**　大学生 172 名 (男性 68 名, 女性 104 名)。**(2) 尺度** (a) 日本語版解離性体験尺度 (以下 RDES; 田辺, 1994)。Ray, June, Turaj, & Lundy (1992) を参考に 5 件法 (0.全くない～4.いつもある) で実施。全 28 項目。(b) 日本語版改訂版出来事インパクト尺度 (以下 IES-R; 飛鳥井, 1999)。全 22 項目 5 件法。教示は“過去のストレスを感じた出来事についてお尋ねします”とし, 出来事の自由記述を求めた。(c) 被受容感・被拒絶感尺度 (杉山・坂本, 2006)。被受容感項目 8 項目を使用。5 件法。

3. 結果と考察　舛田・中村 (2007) を参考に, 対象者は持続型ストレッサー群 (n=56) と一時型ストレッサー群 (n=116) に分類された。重回帰分析の結果, 被受容感は解離への弱い負の影響を持ち (β=-.16), 有意な交互作用は認められなかった。以上より, 被受容感の乏しさは解離のリスク要因となる可能性がある。

第 2 節　被害的認知が解離に及ぼす影響 (研究 3)

1. 目的　被害的認知が解離に及ぼす影響を検討する。

2. 方法　**(1) 対象者**　大学生 207 名 (男性 43 名, 女性 164 名)。**(2) 尺度** (a) RDES。(b) 外傷性の有無。伊藤・鈴木 (2009) を参考に, 致死性・大怪我・身体保全の 3 項目。(c) 日本語版パラノイア・チェックリスト (以下, JPC; 山内・須藤・丹野, 2007)。全 18 項目。被害的な観念の頻度・確信度・苦痛度について測定。5 件法。

3. 結果と考察　対象者は尺度 (b) に基づき外傷性あり群 (n=42) と外傷性なし群 (n=165) に分類された。RDES を目的変数とした階層的重回帰分析の結果, 外傷性と被害的認知の頻度は, 独立して解離へ影響する

ことが明らかとなり (β=.51, p<.01; β=.44, p<.001)，被害的認知の繰り返しが解離を引き起こすと考えられた。従って当事者がその出来事をどのように体験しているのか，という主観的視点の重要性が推察される。

第 4 章　解離を引き起こす出来事要因と解離体験者の心的世界の特徴

第 1 節　出来事の属性が解離に及ぼす影響 (研究 4)

1. 目的　Brunner et al. (2000) が指摘しているように, 外傷性の有無に関わらず，継続的にストレスに曝されること (以下，継続性) は，解離を引き起こすと考えられる。そこで継続性が解離に及ぼす影響を検討する。

2. 方法　**(1) 対象者**　大学生 388 名 (男性 108 名，女性 280 名)。**(2) 尺度**　(a) RDES。(b) 外傷性の有無。研究 3 と同様。(c) 継続性。「その出来事は長期間続いたり，あるいは何度も同じことが繰り返し起きたりしましたか?」に対し，2 件法 (1.はい・0.いいえ) で回答を求めた。

3. 結果と考察　対象者は尺度 (b)，(c) により 4 群に分類された。2 要因分散分析の結果, 外傷性と継続性の主効果は有意であった (p<.00; p=.02)。また外傷性の方が継続性よりも大きな効果量を示した (η^2=.032; .014)。以上より，継続性よりも外傷性の方が解離を引き起こしやすいものの，非外傷性イベントの継続や蓄積により解離が生じ得ることが推察された。

第 2 節　解離体験者の心的世界の特徴に関する探索的検討 (研究 5)

1. 目的　出来事および自己に対する認知が, 解離とどのように関連するのか質的に検討する。

2. 方法　**(1) 対象者**　研究 4 において面接調査に同意した者の内，解離傾向上位 20 名に依頼し，返答のあった 11 名 (男性 3 名，女性 8 名)。**(2) 調査内容**　記入済みの質問紙を調査者と対象者で参照しながら，以下の半構造化面接を実施した。最もストレスフルであると評価された出来事 (the Most Stressful Event; 以下 MSE) について，①状況，②解離が生じて

いたか，③出来事および自己に対する認知を詳細に尋ねた。なお MSE は性被害，失恋，挫折などであった。**(3) 分析手順**　定性的コーディング (佐藤, 2008) の帰納的アプローチを参考に分析した。①録音を元に逐語録を作成した。②①から解離・MSE・認知について言及している部分を抽出した (文章セグメント化)。③文章セグメントにオープンコードを付与した。④オープンコードの特徴が類似したものをまとめ，焦点・下位・中位・上位コードの順に抽象化した。⑤著者とは別の臨床心理士 1 名が評定し，一致率を算出した。

3. 結果と考察　オープンコード 375 件，焦点 142 件，下位 (以下[ ]) 36 件，中位 (以下〈〉) 14 件，上位コード (以下，【】) 4 件を得た。【認知された出来事の属性】について多くの対象者は〈身体的脅威性〉における[身体的脅威性の強さ] (n = 2) ではなく，〈特殊性〉や〈継続性〉など他の属性を帯びた出来事として捉えていた。【出来事の原因と対処可能性】については，〈統制感〉が乏しい ([統制感の乏しさ]) にも関わらず，〈原因帰属の方向性〉は[自責的な原因帰属]が目立った。このような特徴を持つ対象者の多くは【出来事の影響】における多様な〈解離様体験〉を経験していた。以上より①原因帰属や統制感といった個人の認知が，解離と関連する可能性，②解離を引き起こすような出来事の属性は，[身体的脅威性の強さ]に限定されないことが推察される。

第 5 章　総合考察

第 1 節　本研究の成果

本研究の目的は，解離を引き起こす要因を出来事要因および個人要因の 2 側面から検討し，解離の生起要因を明らかにすることであった。研究 1 では，これまで解離の原因と目されてきた外傷性イベントだけでは，解離を説明するには不十分であることが示された。そして個人要因とし

ては，自分を大切にしてもらっている感覚に乏しく (研究 2)，被害的な認知を繰り返すこと (研究 3)，出来事に対する統制感が乏しいにも関わらず自責的に考えること (研究 5) が解離と関連することが示された。また出来事要因としては，外傷性と継続性がそれぞれ独立して解離と関連することが示された (研究 4)。加えて，「認知された出来事の属性」として，非外傷性イベントであっても「特殊性」や「波及性」などを伴う出来事は解離と関連しやすいことが推察された (研究 5)。

本研究では，外傷モデルでは説明が困難な非外傷性イベントによる解離の関連要因を検討することを通し，当事者の主観的評価も重視すべきであることを示した。本研究の知見から，非外傷性イベントであっても出来事が継続性を伴うものであった場合や，個人の持つ認知特性によっては解離を引き起こすほどに侵襲性の高いものとなり得ることが推察される。外傷性は飽くまで解離を引き起こす要因の 1 つに過ぎず，他の要因にも十分な注意と配慮がなされるべきであろう。

第 2 節　本研究の限界および今後の課題

非外傷性イベントによる重篤な精神症状の背景には認知的要因が存在する可能性が示唆されていること (伊藤・鈴木, 2009)，外傷性の影響を統制したとしても解離に影響を及ぼす要因が存在することが明らかになったこと (研究 3, 4)，原因帰属と統制感が解離的な体験と関連し得ることが推察されたこと (研究 5) を踏まえると，外傷性イベントによって生じる解離と非外傷性イベントによって生じる解離では，出来事要因と個人要因の持つ重み付けが異なる可能性がある。そして解離の病理性や質的特徴にも違いがある可能性があるものの，これらについては別の形で検討する必要があるため，今後の課題としたい。

引用文献

American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5*. New York: American Psychiatric Publishing.

(アメリカ精神医学会　高橋三郎・大野　裕・染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村將・村井俊哉 (訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル　医学書院)

飛鳥井望 (1999). 臨床疾患の臨床評価――不安障害 外傷後ストレス障害 (PTSD) ――　臨床精神医学, 増刊号, 171-177.

Briere, J. (2006). Dissociative symptoms and trauma exposure: Specificity, affect dysregulation, and posttraumatic stress. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, *194*, 78-82.

Brunner, R., Parzer, P., Schuld, V., & Resch, F. (2000). Dissociative symptomatology and traumatogenic factors in adolescent psychiatric patients. *Journal of Nervous and Mental Disease*, *188*, 71-77.

Dalenberg, C. J., Brand, B. L., Gleaves, D. H., Dorahy, M. J., Loewenstein, R. J., Cardeña, E., Frewen, P. A., Carlson, E. B., & Spiegel, D. (2012). Evaluation of the evidence for the trauma and fantasy models of dissociation. *Psychological Bulletin*, *138*, 550-588.

本間美紀 (2013). 解離傾向とイメージ現実感との関連性の検討　若手イメージ研究者のためのブラッシュアップセミナー予稿集, 24-29.

一丸藤太郎 (1998). 多重人格障害の研究と臨床――日本・アメリカでの解離性障害臨床像の特徴――　松下正明・浅井昌弘・牛島定信・倉知正佳・小山　司・中根允文・三好功峰 (編) 臨床精神医学講座 第23巻 多文化間精神医学 (pp.213-229)　中山書店

伊藤大輔・鈴木伸一 (2009). 非致死性トラウマ体験後の認知尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　行動療法研究, *35*, 155-166.

Janet, P. (1889). *L'automatisme psychologique*: *Essai de psychologie expérimentale sur les formes inférieures de l'activité humaine*. Paris: A lcan.

(ジャネ, P. 松本雅彦 (訳) (2013). 心理学的自動症――人間行動の低次の諸形式に関する実験心理学試論――　みすず書房)

van der Kolk, B.A., McFarlane, A. C., & Weisaeth, L. (1996). *Traumatic stress: The effects of overwhelming experience on mind, body, and society*. New York: Guilford Press.

(ヴァン・デア・コルク, B. A., マクファーレン, A. C., ウェイゼス, L. 西澤　哲 (監訳) (2001). トラウマティック・ストレス――PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて――　誠信書房)

舛田亮太・中村俊哉 (2007). 近年の国内における解離性同一性障害の分類について――一時的ストレス型 DID の心理臨床的検討――　心理臨床学研究, *25*, 476-482.

Nemiah, J. C. (1998). Early concepts of trauma, dissociation, and unconscious: Their history and current implications. In J. D. Bremner & C. R. Marmar (Eds.), *Trauma, memory, and dissociation* (pp.1-26). Washington, DC: American Psychiatric Press.

Nilsson, D., & Svedin, C. G. (2006). Dissociation among Swedish adolescents and the connection to trauma: An evaluation of the Swedish version of adolescent dissociative experience scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, *194*, 684-689.

Putnam, F. W. (1989). Pierre Janet and modern views of dissociation. *Journal*

of Traumatic Stress, *2*, 413-429.

岡野憲一郎 (2002). 解離　小此木啓吾・北山　修・牛島定信・狩野力八郎・衣笠隆幸・藤山直樹・松木邦裕・妙木浩之 (編) 精神分析事典 (p.60)　岩崎学術出版社

岡野憲一郎 (2007a). 解離性障害――多重人格の理解と治療――　岩崎学術出版社

岡野憲一郎 (2007b). わが国における解離性同一性障害――その成因についての一考察――　トラウマティック・ストレス, *5*, 33-42.

奥山眞紀子 (2005). 虐待を受けた子どものトラウマと愛着　トラウマティック・ストレス, *3*, 3-11.

Ray, W. J., June, K., Turaj, K., & Lundy, R. (1992). Dissociative experiences in a college age population: A factor analytic study of two dissociation scales. *Personality and Individual Differences*, *13*, 417-424.

Ross, C. A., Keyes, B. B., Yan, H., Wang, Z., Zou, Z., Xu, Y., Chen, J., Zhang, H., & Xiao, Z. (2008). A cross-cultural test of the trauma model of dissociation. *Journal of Trauma & Dissociation*, *9*, 35-49.

Sandberg, D. A. (2010). Adult attachment as a predictor of posttraumatic stress and dissociation. *Journal of Trauma & Dissociation*, *11*, 293-307.

佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法――原理・方法・実践――　新曜社

Spiegel, D. (1984). Multiple personality as a post-traumatic stress disorder. *Psychiatric Clinics of North America*, *7*, 101-110.

杉山　崇 (2002). 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究　心理臨床学研究, *19*, 589-597.

杉山　崇・坂本真士 (2006). 抑うつと対人関係要因の検討――被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討――　健康

心理学研究, *19*, 1-10.

田辺　肇 (1994). 解離性体験と心的外傷体験との関連――日本版 DES (Dissociative Experience Scale) の構成概念妥当性の検討――　催眠学研究, *39*, 1-10.

山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 (2007). 日本語版 Paranoia Checklist の作成および信頼性・妥当性の検討　パーソナリティ研究, *16*, 114-116.